

拜所を卯辰八幡の社地の隣地なる神主屋敷地に建築し、祭禮毎に此の所へ卯辰山本社より神籬を迎へたりしが、いつしか一社の如く成り、殊に参拜人等本社よりも繁昌すれど、卯辰八幡町の社はもと旅所の譯にて、本社は卯辰山の社殿なり。今は右旅所なる社殿も、八幡の舊社地へ移し、殊に社殿も盛大に造營し、前の社と稱し、本社なる卯辰山の社をば奥の社とは呼びなしけり。

○卯辰山一本松

此の松は宇多須神社本社の高にありて、山尾の岡の上に生ひたり。古來金澤近邊にての名木とす。龜尾記に云ふ。或説に、卯辰山の一本松は、義經の笈掛松とて、昔奥州下りの時、安宅の關を遁れて此の地に來り休息せられしといへり。平次按するに、義經が事をいへる説は、俳人北蕙が北國巡杖記に、古昔源義經、官控が情にて安宅の關を越え、卯辰山古毘沙門の社地にかゝり、今は心の儘なればとて、篠懸を脱ぎて傍の松枝に懸け給ふ。今に一本松とて古松一樹あり。と載せたり。此の俗説享保以後よりいひ出でたる妄誕ならんか。加藤惟寅の蘭山私記に云ふ。金澤柳町に居

住する井上勘右衛門は、先祖頼朝卿の時代より加州土着の士にて、今も河北郡藥師村邊を井上庄といふ。是其の舊地也。義經奥州下りの頃は、井上左衛門と云ひ、後大膳といへり。向山の一本松は、井上元祖の墓印の木也と云傳ふ。井上の屋敷跡は、大樋の末に吉原といふ村の山手にあり。といへり。三州志隼齋餘考には、卯辰山一本松は藩士井上勘左衛門の灰塚の松と云ふ。勘左衛門は初め利家卿に仕へ、文祿中に流浪し、慶長五年淺井吸合戦の頃は太田但馬守に仕へ、即ち鎗功を以て明年再び藩士と成り、寛永二年歿せり。といへり。今按するに、義經の笈懸松といふ事は、寶永元年の舊跡取調書に、石川郡久安村稻荷の社地に、延寶年中まで義經の笈懸松と云傳へたる古木ありたるよし記載す。此の松の傳説をば、後人聞き過りて、卯辰山一本松の事といひなしたるものなるべし。又蘭山私記の傳説に據れば、卯辰山一本松も、彼の久安村なる笈懸松と同時代の松なりけん。井上左衛門が墓印の松也と云傳ふとあるにて知られけり。但し三州志の傳説の如く、藩士井上勘左衛門が灰塚の松となす時は、寛永二年頃に植ゑたる木にて、其

の時代甚だ遠へり。何れ正説ならんか。龜尾記に、或は云ふ。一本松は此の邊の惣名にて、一針松なるを云ふともいへり。又此の松は古き松にて、古へは唯卯辰の松とのみ呼べりと云ふ。或發句に、

木がらしや卯辰の松の年間はん

平次按するに、一本松の句もあり。句空草庵集に、

一本の松をちからや雀公 北 枝

又加能越百人一首に、金澤八景。(一本松)

また類ひあらし吹きゆく一つ松 西南宮

千世々々と呼ぶ雀鳴時

實にも當地邊にて高名なる松なりしかど、明治廿三年の春二月廿三日、遊人の狂客の爲に燃出し、一時消し留むるといへども再び焼出で、遂に焼亡し、三日三夜許にて火漸く消えたり。今僅に根株残れるのみ。實に遺憾といふべし。